

---

鬼

こめ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼

### 【Nコード】

N8259B

### 【作者名】

こめ

### 【あらすじ】

母に越えてはならないと注意された山。その山の向こうにいたものとは……。\*（少し切ない物語になっていると思います）

**（前書き）**

お気軽に評価して下さい。

「あの山の向こうへ行っちゃダメよ」と、窓の外を指さして太郎の母が言った。

「どうして」

それは何度も聞かされた戒め。――太郎は、その理由が知りたい。繰り返しくり返したずねる。

「ねえ、どうしてあの山の向こうに行っちゃいけないの。ねえ」母の腕にぶら下がる。ねだる様に。

母は、なぜか悲し気な目を太郎に向ける。

「それはね、鬼がいるからよ」

初めて知らされた戒めの答え。太郎は、興味を示す。

「鬼って、なあに。どんなことをするの」

「とても、ヒドイことよ」母は太郎の頭をなでながら言う。

「それじゃあ、分かんないや」太郎は母の顔を見あげる。「もっと、詳しく教えてよ」

「それは、できないわ。とにかくいろいろとヒドイことをするのよ」母は太郎をあやす調子。「あまり詳しく説明したら、太郎ちゃん決つとおフトンにおねしょしちゃうわ」

「ふうん」太郎はどうもスッキリしない。「じゃあ、どうして鬼さんはそんなヒドイことをするの」

「鬼、だからよ」かんぱつ置かず母は答えた。

太郎は驚く。「えっ。それじゃあ、僕がなにも悪いこととしてなくても、鬼さんは残酷なの」

「そうよ」母はいとわし気に頭をふる。「ねえ、太郎ちゃんの良い子よね。お母さんの言いつけ、守れるわよね」

「うん」太郎は素直に返事をした。「他にも、何かいる」

「他にも、って」母は太郎の問いが解せぬといったふう。

「ひとつ目のドラゴンとか、お花の妖精とか」太郎は思いつくまま

に架空の生き物を並べ立てる。

あまりにもキリがなさそう。母は、途中でそれを止めさせる。

「分からないわ。だけど」かがんで、太郎の目線に合わせた。「鬼は、いるのよ」

「鬼は、いる」太郎はオウム返し。

母もそれを強調する様に。「鬼は、いる」

太郎のお気に入りの場所、それは村の広場。友達といろんなことをして遊ぶ。外が明るいうちから日が暮れるまで、ほとんど毎日。

母の手伝いは時々でいい。太郎はまだ子供。決められた時間までに帰宅すれば、文句も言われない。

今日も、太郎はそこへ出かける。見慣れた友達の顔。

さっそく、あの話をする。「ねえ、鬼って知ってる」

「あつ、知ってる」という声と、「なに、それ」という声。

皆が広場の中央に集まる。それぞれが自分の知ってる限りのことを教え合う。だまって聞いている子も。

しかし、驚くような情報は、何もない。太郎の知識にほんの付けたし程度。どこの母親も、あまり詳しい説明はしていない。

好ましくないと判断したのか、ただ単に面倒臭がつてか……。

とにかく太郎たちは、話を打ちきった。これ以上つづかないのだから、仕方がない。

さて、今日はなにをして遊ぶ。話題はそちらにむかう。

これは、単純に多数決でいい。缶蹴り。夢中になって遊ぶ。幸せの時。心地よい疲労感。

夜がくるまで、つづけられる。

そして翌日、翌々日と、日を追うことに鬼の話は少なくなっていく。完全になくなってしまうのも、時間の問題。

新しい知識が得られないのだから、いつも話す内容が同じ。飽きてしまう。子供なら、なおさら。

ただ、太郎はひとりきりになることがある。理由はいろいろ。友達がつまらなかつたり、母にかまってもらえなかつたり。暇を持てあましてしまう。

そんな時、誰にも教えていない秘密の場所へいく。村はずれの高い山を少し入ったところ。伐採され、平たく整地されている。見晴らしは最高。丸い切り株が指定席だ。腰かける。

やることは、空想や思索。ほとんどが鬼について。母にその存在を教えてもらってからというもの。

つまり、友達と話す機会は減っても、太郎の鬼に対する興味は薄れていない。むしろ、高まるばかり。

「鬼かあ」太郎は呟く。

抱えた膝のうえにアゴをのせて、遠くを見つめる。視線の先は、母に越えてはならないと注意された山。

「この世に、いるのかなあ」

太郎は純粹。しかし、すべてを鵜呑みにはできない。

今までちょっとしたイタズラなどが原因で母に怒鳴られたり、お尻を叩かれたりしたことはある。だが、何の罪もなければ、そんな仕打ちは受けない。周りの誰からも。

怒って手を上げたりするのは、自分を正しく導くため。要するに愛情。そう、思っている。

しかし、鬼は罪もないものにヒドイことをするという。

「信じきれないなあ。そんなに怖い生き物って。だけど、お母さんがウソをつくとは思えないし……。うううん」

太郎は堂々巡りをくり返す。いつまでたっても、答えは出ない。

そんなある日。いつもの広場で友達を前に、太郎は我慢しきれなくなる。

「ねえ、みんなで行ってみようよ」と、あの山を指さす。

「いやだ」全員が反対。中には、顔が青ざめている者も。「もし鬼に捕まったら、どんな目に遭うかわかんないや」

「まっつてよ、まだ鬼がいるって決まっただけじゃないだろ。それに、ヒドイことをされるとは限らない。鬼がいたとしても」太郎は必死になって説得する。「優しいかもしれないよ。友達になれるかも」皆は顔を見合わせた。誰も、首を縦にふらない。

「やっぱりダメだよ。注意されてるんだから」友達のひとりが上目使いにモジモジして言う。「大変なことになったら、どうするのさ」べつの友達も言う。「そうだよ。それに、鬼がいなくてもあの山を越えたのがバレたら、怒られるよ」

「そうだ、そうだ」と、皆が同意。

「ちえ、なんだよ。怒られるのが、そんなにイヤなの。お尻を叩かれるぐらいだろ」太郎は両手を広げて訴える。「だいいち、あの山を越えるのが、そんなに悪いことなの。皆だって、鬼がいるかいなにか確かめたいだろ」

皆だまっつて、うつ向く。

太郎はつづける。「ちよっとした冒険だよ。行こうよ」

側にいた友達の腕をつかんで、引っ張った。

その友達は太郎の手を振りほどく。「やっぱ、嫌だよ」

「どうしてさ」太郎はその理由を問う。

答えは、返ってこない。誰もその場を、動かない。

太郎は、しびれを切らす。「じゃあ、もういいよ。僕ひとりで行くから」

友達に背を向け、駆け出した。

皆、おどろく。

「あつ、待って。行っちゃ、ダメだよ」と、悲鳴に近い叫び声。

「もどってこいよ」「どうなっても、知らないぞ」次々に大声が上がる。

しかし、太郎は止まらない。気持ちは、押さえ切れない。走り出した勢いが、それをますます大きくさせている。

太郎は広場を出て、村を横ぎり、あの山の麓にたどりつく。頂きを見上げ、ふたたび走り出す。

雑木林を、かき分ける。細い獣道づたいに斜面を上り、てっぺんまでくればあとは下り道。楽。

やがて、目的の地が目前に広がる。

「ついたぞ」立ち止まり、太郎は感動する。

開けた土地が広がり、ずっと遠くに集落のようなもの。今までに見たことのない風景だ。子供にとっては、大冒険。

「さて、これから先どうしよう」太郎は、考える。山を越えて後の計画は、立てていない。「とりあえず、その辺を歩いてみよう」

周りに気を配りながら、歩をはこぶ。一步、二歩……。

とその時、かたわらの茂みから何かが飛び出してきた。

太郎を押し倒し、おおい被さる。ボロを身にまとった老婆。白髪を分けて、額から二本の角。

「まだ、ほんの子供だから、許してやる」二本角の老婆は荒い鼻息をフウウウツと吐き出す。「そうでなければ、八つ裂きにして食っちまうところだ」

「お、お婆ちゃんは……」太郎はとつぜんのことに驚き、言葉がつかない。

老婆は言う。「わしか。わしは鬼さ。人を呪い、危害をくわえる」わずかな沈黙が落ちた。

先に口をひらいたのは、太郎の方。「どうして、どうしてそんなことするの」

「それは、わしが鬼じゃから」老婆の瞳が、少し悲しげに湿った。

太郎の上から降りる。

「もう、ここにはくるな。わし以上に、人間を憎んでいるものも大勢いる。子供だからといって、容赦されるとは限らん」ボロの土を手で払う。「いけ」

あの山を指さした。

太郎は唖然と老婆を見つめる。

起き上がり、ややためらってから走り出す。血の気が引いた顔は、青白い。



麓のところで立ち止まり、振り向いた。「お婆さんは、人間にしか見えないや。角がはえてるだけで」

「ふん」と、老婆は口の端を歪める。「もともと鬼だったわけじゃねえさ」

「それは、どういうこと」震え声できく。

「大人になれば、分かるはず。お前さんの村の人たちが、いかに年寄りをゴミ扱いするかが。そしてわしが、人を憎む鬼になった理由が」ヒツヒツヒツヒツと、老婆は狂ったように甲高く笑った。ひと滴の涙が頬を伝う。

「人はみな、鬼なのさ。本当は」どすつと、地面を踏みならして老婆は叫ぶ。「さあ、その姥捨<sup>おは</sup>て山を越えて、自分の村に帰れ」

ガ二股にゆつくりとにじり寄った。

太郎は、今度こそ脇目もふらずに逃げる。

鬼はいるのよ。

鬼はいるのよ。

鬼はいるのよ。

母の言葉が頭の中にこだました。

悲しげな母の目。      あの鬼の老婆に、少し似てると思う。

- 了 -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8259b/>

---

鬼

2010年12月14日04時46分発行